ドラマ女性学

〈見てしまった者の責任〉

ジャーナリスト
松本侑壬子

軍服の兵士と並ぶ黒い眼帯の女。一度見たら忘れられない強烈な横顔だ。英米映画『プライベート・ウォー』（マシュー・ハイネマン監督）は、レバノン、リビア、チェチェン、東ティモール、シリア…硝煙絶えない世界の戦場で活躍した伝説の女性ジャーナリスト、メリー・コルヴィン（一九五六―二〇一二）の生涯を描く。

戦場ジャーナリストと一口にいっても、それぞれが背負う背景や国籍、性別、所属のあるなしなどの違いはあるが、丸腰で戦争の現場に飛び込むのは共通だ。紛争の地では命の保証はない。万全の準備はしていくのだが、それでもいつ紛争に巻き込まれて捕虜になったり負傷したり、殺されるかはわからない。運を天に任すほかないのだ。

「そんな危ない所に、なぜ行くのか？」という非難の声が上がるのは、日本でも例外ではない。なぜ行くのか？行って、現場でこの目で確かめなければ、事実がわからない。とりわけ、戦争の犠牲となった子どもや非戦闘員の住民たちの悲惨な実情が、世界に知られないままになるからだ。

そうした使命感をもって、戦争のもたらす悲惨を報道する女性ジャーナリストたちも増えてきた。世界の目を、正視に耐えないほどの残虐行為にすら向けさせようと懸命に闘った一人が、黒い眼帯のメリー・コルヴィン（ロザムンド・パイク）だった。それが、「見てしまった者の責任」とでもいうように―。

本作は、戦場での撮影経験豊富なドキュメンタリー製作者ハイネマン監督の初の劇映画。メリーを〝戦場に魅了されてしまった女性〟として、その恐怖や苦悩、葛藤と闘いながら戦場を離れられない心理にまで分け入り、二〇一二年、五六歳でシリア内戦を取材中に斃（たお）れるまでの激しい生涯を描く。

メリー・コルヴィンは米ニューヨーク州ロングアイランド生まれ。エール大学を出ると、UPI通信社を経て、英サンデー・タイムズ紙の記者に。特派員としてスリランカの民族紛争を取材中に銃撃戦に巻き込まれて被弾、左目の視力を失う。その後メリーは、優秀外国人記者に対する「英国プレス賞」に輝くが、ロンドンでの授賞式に黒革の眼帯をして現れ、周りをアッと言わせる。

日本では、かつて黒い眼帯姿の戦国武将伊達政宗が〝伊達男〟の美名を残したが、メリーも障害を逆手にとり、眼帯姿を強烈な個性にしてしまった。上司の説得にも耳を貸さず、戦場記者を天職として眼帯のまま世界中の危険な紛争地帯に吸い寄せられるように渡り歩く。だが、自ら記録した恐ろしい現実の重さにメリーの心は蝕まれてゆく。日常が日常でなく、恋をしても、まるで気晴らしのような空虚感。そして憑かれたように戦場へ足が向く…。

二〇一二年には、世界全体で三七人のジャーナリストが職務中に殺害され、シリアではメリーを含めて男女九人が犠牲となった。その一人、日本のフリージャーナリスト山本美香さんの悲劇はメリーの死の半年後のことだった。今も世界中で紛争の悲劇は終わらない。

『プライベート・ウォー』

イギリス・アメリカ合作映画（110分）

監督：マシュー・ハイネマン

出演：ロザムンド・パイク、ジェイミー・ドーナン、スタンリー・トゥッチほか

公開中

©2018 APW Film, LLC. ALL RIGHTS RESERVED